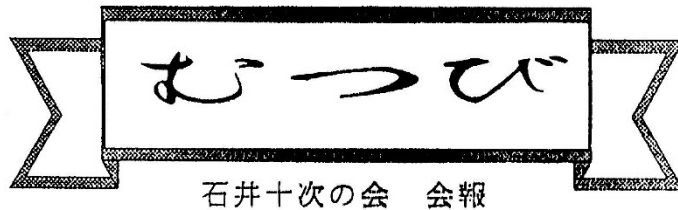


2020年
(令和2年)
10月13日



277号

石井十次の教えに学ぶ

新富町長 小嶋 崇嗣

まだ児童福祉・社会福祉の概念のない時代に、十次先生は、日本で初めて孤
児院を創設した人物であることは知られています。

一人の子どもを預かったことをきっかけに、児童救済事業を開始しましたが、
医師になる夢と、児童救済への思いで葛藤した結果、「医師になる人は大勢い
ても、児童救済を行う人間は自分しかいない」と確信し、生涯を児童救済に捧
げる道を選択されました。

その背景には、「二人の主に仕えることはできない」というキリストの教え
があり、医学書を全て焼き尽くし、児童救済一筋に生きる覚悟を決められまし
た。「二兎を追う者は一兎をも得ず」ということわざにもあるとおり、自らの
信念を信じ突き進む姿は、単に選択、決断という生易しいものではなく、信仰
の中で悟りを開かれたものだと思われます。

児童救済の道に進んで行く中で、急速に近代化を推し進める日本国内では、
貧困に苦しむ人が多くなり、孤児院の数は年々増加しました。

生活が成り立つか不安な日々が続きましたが、そのような中でも十次先生は、
「全ては神の思し召し」として、児童救済の道を進まれております。

子どもたちが将来自立できるよう職業技術を指導したことは、後に孤児院の
貴重な収入源となります。

また、心も体も健康に育つようにと特徴ある養護方法で児童教育に取り組み、
孤児院内に小学校を造り、孤児院を養育院としてではなく教育院と位置付けて
います。

十次先生は、教育に強い関心をもっていました。フランスの思想家ルソーの
著書「エミール」の中で、「子供の教育は心身の自然な発達段階に応じて、子
どもの自主性を育て尊重し、諸能力を引き出すことにある」という基本理念が
描かれていますが、その内容に深く感銘を受け、「幼児は遊ばせ、子は学ばせ、
青年は働かせる」という時代教育法を案出しております。これが、茶臼原の自
然の中で自由に遊び学ばせる理想郷づくりの礎となりました。

里親制度を試行導入したのも十次先生が国内初であり、施設だけでは賄えな
い「心と体」のケアを考え、家庭的な環境で育ててもらいたいという強い思い

が現在の里親制度の基礎となっています。

孤児院にかかる資金は、こうした十次先生の取り組みに賛同してくれる人々の寄付等だけでは十分賄えなかったため、新たに「音楽隊」を結成し、児童たちによる演奏を行った後、孤児院の目的や現状を訴え、義援金を集める手法を考え出しました。

こうした十次先生の活動が多くの人々に感銘を与え、たくさんの理解者や協力者が増えていきました。孤児院の無制限収容を宣言した愛の深さ、広さに心惹かれる思いがしております。

国内に目を向けますと、少子高齢化による人口減少が進行し、地域や家庭を取り巻く環境が大きく変化しています。それに伴い、高齢者や障がい者、子育て世帯など、支援を必要とする住民の方々の抱える課題も、複雑かつ多様化しています。新富町も例外ではなく、こうした状況の中、誰もが安心して暮らすことのできる町づくりのためには、行政サービスのさらなる充実に加え、家族や地域の人々による支えあい、助け合いが重要となってまいります。

本町におきましては、「みんなで支えあい 自分らしく 安心して暮らせる やさしいまち しんとみ」を基本理念とし、近年の社会情勢の変化を反映させ、新たな課題にも対応しています。

近年では、核家族化や共働き世帯の増加、地域のつながりの希薄化などにより、子育ての不安、孤立感が高まり、家族や地域の中で子育ての知恵や経験を共有することがむずかしく、子育てに周囲の手助けを求めにくくなっている状況です。また長時間労働等により父親の家事・育児への関わりが十分でない中で、子育てが孤立化し負担が大きくなっています。

家庭の中で子どもを育て、不安や悩みを相談できずに、一人で子育てを抱え込むことのないよう、親の就労の有無に関わらず、すべての子育て家庭を支える取組みが必要になっています。

地域における子育て支援の充実を図る施策として、育児不安について専門的な相談が出来るこども家庭総合支援センターや、親子が気軽に集い交流が出来るつどいの広場など子育て支援の拠点づくりを推進しております。

また、子育て家庭が歩いて行ける身近な場所に親子で集まって相談や交流が出来るよう児童館の設置も行っています。

子育て支援の拠点とは、親子と地域を結びつける「架け橋」のような存在であり、親子が気兼ねなく集い、つながりあうことの出来る場は必要不可欠です。

十次先生のような教えが、町の施策の道しるべになっています。これからもこれらの教えを継承しながら、更なる行政サービスの向上を目指していきたいと思っております。

岩村真鉄は十次の姉・静子と結婚し、十次の義兄となった。岡山孤児院の開設を助け、茶臼原に原野を購入して孤児院農林部の基礎を作った。すぐれた郷土史家でもあった真鉄は、中世時代の高鍋城主・土持氏の墓を発掘し、高鍋町の郷土史に不滅の足跡を残した。

1. 真鉄、十次の姉・静子と結婚し義兄となる

岩村真鉄は安政5年(1858)2月、高鍋村道具小路に生れた。十次より10歳年長である。石井万吉の娘・静子と結婚し、十次の義兄となった。藩校明倫堂に学び宮崎学校を出て、明治10年高鍋小学校訓導となる。万吉は十次を真鉄の家に預け学校に通わせた。明治15年十次は岡山甲種医学校に入学する。卒業間近となった明治20年7月、十次は孤児3人を救済する。彼は孤児教育に従事する決心をし、両親に許可を求めた。父・万吉は激怒し、ただちに真鉄夫妻を呼び、岡山に赴いて十次を説得せよと命じた。「十次はこれまで意志変じやすく貫徹したることなし。いまや殆ど卒業に近づきながらまた志を変え孤児教育にうつらんとするが如き、甚だ非なり。貴公すみやかに出発し、十次を面詰してその志を翻えさせよ」と厳命した。真鉄は岡山に行き、十次の意志を阻止しようとしたが、実情を知ると十次の苦衷を察し、折衷案を提示した。「一書生の起業、信を天下に得がたし。同情深き人を頼みて品子と共に孤児養育に当たらしめ、己は医学を修し父母を安んぜよ」十次はその案に従った。三友寺に孤児院を設け、孤児養育を品子と森友治、岩村加次郎にまかせ、自分は医学校に通った。しかし明治22年、「人は2人の主に事うること能わず」と決心し医学書を焼き捨てた。それを知った万吉は天を仰いで嘆息した。

2. 真鉄、孤児と共に茶臼原に移住し原野を開墾

十次は将来孤児が入植する土地を高鍋に購入することにし、真鉄ほか同志6人に高鍋付近の土地を物色させた。万吉も協力した。その結果、明治23年に上穂北村茶臼原に60町歩の原野を購入する。真鉄は明治25年に十次の招きに応じて岡山孤児院に勤め、会計事務を担当。27年4月、真鉄夫妻は年長孤児60名を率いて茶臼原に移住。住居建設、開墾など院児と辛苦を共にした。明治36年、長男・真琴を米国に留学させ、帰国後は茶臼原農林部の運営を任せしたが、真琴は惜しくも39年に病没する。真琴に期待し、孤児院を託そうと考えていた十次は心から嘆いた。真鉄は長男の死に屈することなく孤児院の支援を続け、大正3年、十次永眠後は未亡人辰子を助けて院務を見ること9年に及んだ。

3. 郷土史家としての真鉄、土持氏の墓を発見

大正15年2月、真鉄に東京から来客があった。木村弘子と名乗る老夫人は、日向財部(現在の高鍋)城主土持氏の子孫という。先祖の墓を拝むため高鍋を訪ねたという。真鉄は郷土史に詳しくしたが、財部土持氏の墓は知らない。もしあるなら古い寺であろうと見当をつけた。大平寺は江戸時代まで存在した古い寺だが、今はない。翌日共に大平寺部落を訪れた。墓地をさがすと、竹藪のなかに倒れた古い墓石があり、見慣れない形である。埋もれた墓石はほかにもあった。樹の根元から掘り起こした墓石に、金粉燦然と「梁山棟公大禅定門」と刻まれた法号が輝くのが見えた。財部土持氏の最後の城主・土持高綱の法号である。思いがけない発見に真鉄と木村夫人は驚喜した。夫人はその場の土を持ち帰った。

平安時代中期に、土持氏は県(延岡)を中心に勢力を持ち支族が高鍋に来る。斉衡年間(854~857)に土持秀綱が城主となり、土持氏は600年余の長きにわたり高鍋を治めた。当時勢力を有していた都方神社の社人・日下部氏から土持栄妙が権力を委譲され児湯地方に勢力を伸ばす。鎌倉時代になると伊東氏が日向国地頭となり都於郡を中心に勢力を伸ばす。土持氏と伊東氏の衝突は避けられなかった。土持高綱と伊東祐堯の軍勢は小浪川で激突する。この合戦で土持氏は完敗し、城を伊東氏に明け渡し滅亡する。伊東氏は土持氏の遺物を徹底的に破壊し、その痕跡まで無くした。真鉄はその最後の城主・土持高綱の墓を掘り当てたのである。その後も真鉄は発掘を続け、自費で人夫を雇い、発掘した31基の墓石を大平寺部落の山腹に並べ、「土持墓地」と命名した。昭和47年4月、高鍋町は土持墓地を正式に高鍋町文化財に認定した。真鉄は天寿を全うし昭和14年5月29日に没した。享年82歳。

参考資料：信天記 西内天行著、石井十次 黒木晩石著、石井十次 柿原政一郎著、高鍋の史跡 高鍋町教育委員会 (編集委員 石川正樹)

《 お し ら せ 》

★新会員のご紹介（敬称略）

【宮崎市】 鬼塚 理有子 鳥居 かおり
嶋田 喜代子 山崎 美和子
鈴木 智子 寺原 美保子
尾形 千鶴子 梅川 真理子
鳥居 大将 長友みかん農園

【延岡市】 甲斐 厚子

【都城市】 川田 明美

【綾 町】 矢野 孝幸

★ご寄付をいただきました（敬称略）

【宮崎市】 香月 保基

★8/21～9/20の資料館来館者

団体・グループ	0人
個人	18人
計	18人

ここまでの掲載者は編集委員会開催の都合により9月20日までのものとしています。

★11月号の通信発送作業

11月11日（水）9時から印刷・製本
12日（木）9時から印刷・製本

この会報は、宮崎県を中心に全国1700余の個人・団体に毎月送付しています。

社会福祉法人 石井記念友愛社

☎ 884-0102

宮崎県児湯郡木城町大字椎木 644-1
後援会「石井十次の会」

TEL/FAX 0983-32-4612

メール

yuuaisya-jyuujinokai@kijo.jp

● 編集委員会近況報告

編集委員会は本年度も月末に方舟館にて開催しています。

①ちなみに編集委員を紹介

竹之下悟 編集委員長（西都市）
生駒 亮 編集委員（高鍋町）
徳地順子 編集委員（高鍋町）
石川正樹 編集委員（高鍋町）
成合仁子 編集委員（新富町）



8月の編集委員会

コロナ禍で三密防止のためマスク着用とソーシャルディスタンスに努めています。

但し、成合編集委員は9月から方舟館事務所の宇田津真理子氏の後任となりました。

しばらくは1名欠員の状況です。

②業務は、会則に次のように定めています。

『石井十次の会』主宰の「むつび」4頁分の内容に関する企画・依頼・取材・校正・発行等

会員や有識者への原稿依頼は年間計画に基づき進めています。もちろん十次の教えを基盤とした執筆をお願いするのですが偏りのないよう公平性にも努めています。重視しています。

★編集後記

「むつび」巻頭は新富町長の小嶋崇嗣様から玉稿をいただきました。ありがとうございます。前述のとおり事務所を退任された宇田津真理子氏には編集委員会も大変お世話になりました。てきぱきとした仕事ぶりや編集委員への的確な助言など感謝します。

※文責 竹之下